百々裏話（42）

おもて　あきら

〔音曲道歌雑考―その四―〕

＊歌の漢数字は本稿掲載道歌の通し番号、算用数字は当該道歌群中の歌順を示す。

(2) **音阿弥百首系道歌**（つゞき）

前回に翻印した音阿弥百首には、少々の辞句の相違はあつても、前々回までに紹介した歌仙系音曲道歌37首と同内容と認められる歌が22首（1・2・3・13・15～19、22～27、32・33・35・38・40・41・68）ある。また、4音曲は阿阡の二字にはづれめや　阿阡の心物ごとにあり　（五二）は、歌仙系の天地をば阿阡の二字にかたどれば　阿阡の心物ごとにしれ　（三三）の変化した形と認められるし、20声のうら表といふを知らずして　出るをばかりに謡ふべからず　（六二）28暁に限らぬものをつかふ声　常にうたひを謡ふべきなり　（六四）の二首も、それぞれ、歌仙系道歌の声のうら表といふを知らずして　章を分けざる音曲は憂し　暁に限らぬものをつかふこゑ　（三一）　こゑに心をゆるすべからず　（一六）の変形と考えられるから、これらをも加えると、25首の歌が歌仙系と音阿弥百首との間に共通していることになる。

そしてこの両者の関係は、同内容で辞句が少々異なつている歌、たとえば、九の　さしごととさし声替る事ぞかし　ことばと声と心あるべし（百首系）　さしごととさしごゑ替る事なれば　ことばと声とかはりあるべし（歌仙系）などを比較すると、大むね歌仙系道歌の方が原形に近いと考えられるし、前掲の三首のように別の歌と謡める方が妥当なほど変化している歌の場合にも同じことが言えるようであるから、歌仙系道歌に基づき、それに増補改変を加えて成立したのが音阿弥百首系道歌であると認定してよいであろう。

一体に、音阿弥百首には数を百に増すための苦労の跡が顕著である。特に目立つのは、音曲道歌とは言いかねるような一般道歌風の歌が多い点であろう。歌仙系では　わが心ただ井の内の蛙にて　海川知らで偏執ばしすな　（三五）の一首のみが、音曲だけに限らぬ道歌であつたが、音阿弥百首では、40、42～45、48～54、56～58、62、63、67、69～71、78、79、81、82、87、93～100など、30首以上が一般的道歌と言いたい内容である。特に、八首も存在する「何事も」で初まる歌は、

44何事も知らず顔なるふりをせよ　問はず語りはなほ無益なり　（七四）

など、例外なしに何事にも通用する一般的内容である。また、

82万代の能を極むる身なりとも　我とわが身を慢ずべからず　（一一）

98我が芸を我と慢ずることなかれ　人の許すぞ上手なりける　（一三七）

96我いかに初心の者と思ふとも　人の許すぞ上手なりける　（一三五）

など、同じことの言いかえや、同じ下句の使用された例も見出だされる。

声出でず小音なりと音曲を　習ひて謡ふ人はよきなり　（六六）

とにかくに声の出づるぞ音曲よ　声なき者は音曲もなし　（一二五）

の如きは、互に矛盾する内容の歌が同居している例である。百首に揃えるための無理が、こうした不統一を招来してしまつたものであろう。

右のような音阿弥百首の性質からも、歌仙

系道歌の方が古いことは疑えないと思うが、歌仙系に基づいて音阿弥百首系が成立したと考える場合、歌仙系と重複する25首の位置や順序が音阿弥百首ではばらばらで、まとまった形で投影していない点や、歌仙系の12首が除かれている点が問題となろう。歌順や位置の点は、音阿弥百首に、冒頭部に「音曲」の語で初まる歌を集めているなど、編集意識の働いた跡が看取されるので、さほど疑問視する必要もあるまいが、一方では音曲道歌と言えない歌まで集めていながら、歌仙系の音曲道歌12首を捨てている点は重大であろう。

そうした見地から注目されるのは、音阿弥百首系道歌と極めて近似した内容を持ちながら、歌仙系道歌のほとんどすべてを含む別の音曲道歌群が存在することである。

前回の音阿弥百首の翻印には内閣文庫蔵の『音曲百首』をも校訂に使用したが、同書は百首道歌のあとに、謡伝書の抜書半丁分をはさんで、「音韻直拗二音之図哥」と題する別種の音曲道歌一一三首を合写し、末に永禄三年五月十三日の暮松因幡守越智道春の奥書のある伝書である。その内閣文庫本と似た内容を持つのが鴻山文庫蔵『永禄三年暮松伝書』(混沌懐中抄他)で、暮松通春の著らしい混沌懐中抄系の謡伝書を中心にして、首部に音曲道歌、末部に「五音直拗二音図歌」を収め、末に永禄三年二月の越智通春の奥書がある。

この鴻山文庫蔵『永禄三年暮松伝書』冒頭部の音曲道歌は、現状は全99首であるが、中の一首(14首目)は別々の歌の上句と下句を接合したものであり、その誤写を復原して数えれば百首となる。この百首道歌を仮に暮松百首と名付けておこう。

さて、暮松百首と音阿弥百首とを比較して見ると、85首までは同じ歌(辞句の異同少なからず)であるが、15首は出入がある。即ち音阿弥百首から30・50・53・55・57・58・62・63・67・68・76・83・97・98・99の15首を除き、別に15首が加わった形であるが、新しい15首のうち、末部に位置する左の三首、98、鳴りもののあらん所の音曲に　扇拍子はいらぬものかは　(一二)

99、五音をも知らずし謡ふ謡ひ手は　うたふかひなき音曲と知れ　(一二)

100、人ごとに極めのあると心ゆる　蒼海よりも深きこの道　(一三)

のみが本稿に未出の歌であり、他の12首はすべて歌仙系道歌に含まれていた歌である。但し、音阿弥百首には含まれていた歌仙系の歌のうち一首(九)が無いから、暮松百首に含まれている歌仙系道歌は36首である。しかし、

くりかえし耳から学ぶ名手名曲

観世流・声の百番集

第1期刊行
50番・38冊

■絶賛発売中■

16 小袖曽我
観世元正・観世元昭
藤波順三郎・藤波重満
野村四郎

鵜飼
観世銕之丞・観世寿夫
観世静夫・山本順之
二曲収録　一〇〇〇円

17 善知鳥
梅若六郎・観世喜之
梅若泰之・梅若景英
九〇〇円

2 鶴亀
武田太加志・岡久雄二

羽衣
観世元昭・橋岡久共
浅見重弘・藤井徳二
二曲収録　九〇〇円

次回配本　十二月五日

28 蟬丸
梅若万三郎・梅若猶義
梅若万紀夫
九〇〇円

筑摩書房

前掲の末部三首が、数を揃えるために附加された感が強いことを考慮すると、暮松百首の原形には九も存在していたもので、歌仙系道歌37首はすべて暮松百首の原形に含まれていた可能性が強いのではなかろうか。

もし然りとすれば、歌仙系道歌に基づき、そのすべてを包含する暮松百首の原形がまず成立し、それに改変の手を加え、結果的には歌仙系道歌12首が脱落した形の音阿弥百首が後に生まれたとの推測が可能となり、甚だ工合がいい。歌仙系と暮松百首と音阿弥百首とで、同じ歌ではあるが若干辞句が異なる歌を比較すると、音阿弥百首よりは暮松百首の方が遥かに歌仙系道歌の形に近いことも、右の推測を助けるかのように思われる。

以上の推測は、同じ暮松通春の伝書に、永禄三年二月の鴻山文庫本では暮松百首の形、同年五月の内閣文庫本では音阿弥百首の形で見えることから、音阿弥百首の成立時期やそれへの暮松の関与をも想像せしめ、一そう興味深いのであるが、実は一つ難点がある。というのは、暮松百首にのみ見られる歌仙系道歌12首のうちの11首までが、同百首の終末部（87～97）に集中していて、音阿弥百首から15首ほどを脱落した道歌群に、後人が歌仙系道歌を参照しながら増補改変した結果が暮松百首の形であるとも考えられるからである。どちらかと言えば前の推測の方が蓋然性が強いように思えるが、後者の疑問も必ずしも氷解しているわけではなく、私自身まだ結論を出せないでいるのが現状である。（41・10・30）

昭和42年　銕仙会の例会（予定）

1月　翁　静夫　千才　暁夫

2月　絵馬　幸徳
　　杜若　宏充
　　善知鳥　寿夫

4月　忠度　真義
　　山姥　静夫　白頭
　　西行桜　銕之丞　素囃子

5月　花筐　四郎
　　鞍馬天狗　銕之丞　白頭

6月　皇帝　寿夫
　　松風　順之

7月　百万　銕之丞　法楽之舞
　　歌占　雅

9月　千手　慶次郎　鼓曲
　　国祢　静夫

11月　半蔀　銕之丞
　　鷹の泉（予定）　イエーツ原作

12月　野宮　寿夫
　　菊慈童　宏充

12月　花月　順之
　　砧　静夫

どうぞ明年もよろしくお願いいたします。会員の方で特別のお申出のない限り今年同様会員を御継続なさるものとしてお取扱いします

能・お茶の御写真

観世写真部

前島良彦
前島久男

港区芝白金里町七七
電話白金（441）一八四七五番
一五〇〇九番



化学工業の
総合メーカー

電気化学工業

プラスチック・化学薬品
電炉品・肥料・セメント